本丸御殿の発掘調査

平成 29 年 3 月 18 日（土）
熊本城調査研究センター 金田一精

本丸御殿の歴史

慶長 15 年（1610）頃 本丸御殿大広間完成

細川氏時代には居所としての性格は薄い、主に儀礼の場として使用

慶応 3 年（1867） 本丸御殿を藩庁とする

明治 4 年（1871）8 月 廃藩置県により鎮台設置

明治 7 年（1874）6 月 鎮台本堂は花畑屋敷から本丸御殿に移転

明治 10 年（1877）2 月 19 日 西南戦争に際し本丸御殿焼失

本丸御殿の復元事業

期間：平成 11 年度～平成 19 年度

平成 20 年 4 月 20 日落成式

〔復元〕

- ・大広間棟 1202.31 m²
一重一階（一部三階および地下通路）、木造、入母屋造、本瓦葺
- ・大台所棟 1209.03 m²
一重一階（一部二階および地下通路）、木造、入母屋造、本瓦葺
- ・数奇屋棟 103.91 m²
一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺
- ・麒麟之間・長之間棟 277.25 m²
一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺
- ・御小姓部屋廊下棟 61.90 m²
一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺
- ・長局棟
一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺

〔整備〕

- ・玄関棟 一重一階、鉄骨造、入母屋造、銅板葺

発掘調査

期間：平成 11 年 5 月～平成 18 年 3 月

調査面積：約 5200 m²

調査成果

- 出土した礎石・礎石列・礎石抜取痕などから、「御城内御絵図」の平面にほぼ一致する。台所のカマドの方向が異なっていたり、絵図に無い下屋も検出している。
- 柱間寸法が 6 尺 5 寸であることが確認された。
- 本丸御殿の基礎構造が立体的に確認できた。
- 瓦や建築金物が多様であること。銅製・真鍮製の飾金具が多数出土し、復元根拠となった。
- 部位が特定できた炭化材から建築材の樹種を特定できた。
- 二様の石垣の延長の確認、御小姓部屋下の埋没石垣、大広間下の柱穴、御天守廊下の遺構の重複から、本丸の曲輪変遷の一端をみる事ができた。
- 焼失時の官軍による鎮台使用の実態が明らかになった。ガラスの使用や輸入ドアノブなど、建物事態の改造もあった。徽章、ボタン、パケツ、水筒、ゲベール・エンフィールド銃の工具などがかたまっていた出土している。
- 鎮台印・ピストル・短射銃・時計などの希少遺物が出土した小広間三階櫓は官軍の幹部が使用していた可能性が高い。
- 焼失後、焼け残った大型の部材は片付けられ、闇通路や露地は整地されている。露地には大型の建物が建てられている。

焼失原因は・・・

- 消防局の現地視察では、出土部材は完全延焼しており火元の特定は不可能。
- 米は出土しているが、少量である。大台所や西廊下から数百粒出土している。
- 瓦は全域から出土しているが、闇通路出土のものが最も焼けている。これは部材の量に比例しているようである。
- 石垣の焼損は闇通路・小広間・長局が顕著。いずれも狭い通路・窪地状で、部材が落ち込んで激しく焼けたと想定される。